聖女の姉ですが、宰相閣下は無能な妹より私がお好きなようですよ？1

渡邊香梨
Kaori Watanabe

RB
レジーナ文庫

登場人物紹介
character

レイナ（十河 怜菜）
妹であるマナのお守り役として異世界に召喚された『聖女の姉』。いつもは冷静で利発だが、妹と比べられることが地雷。自分の能力を活かして、異世界で自立するために行動するが宰相エドヴァルドにだんだんと気に入られ――

エドヴァルド・イデオン
アンジェス国の宰相。表情を変えない冷徹な男だがレイナの豪胆さと冷静さにだんだんと惹かれていくうちに独占欲を隠さなくなる。

マナ（十河 舞菜）
レイナの妹。可愛らしく、家族に愛されて育った。無邪気にレイナの立ち位置を奪い続けてきた過去を持つ。

ディルク・バーレント
エドヴァルドの異母弟。頭がよく回る研究者気質。

セルヴァン
イデオン公爵邸の優秀な家令。レイナの『心の父』となる。

ヨンナ
イデオン公爵邸の侍女長。レイナの『心の母』となる。

フィルバート・アンジェス
アンジェス国の若き国王。綺麗な外見と裏腹に、非情な内面を持つ。

目次

聖女の姉ですが、宰相閣下は無能な妹より私がお好きなようですよ？1　7

書き下ろし番外編
だから今日も宰相室の扉を叩く　361

聖女の姉ですが、宰相閣下は無能な妹より私がお好きなようですよ？1

プロローグ　双子姉妹の召喚

「レナちゃん！」

おかしい。私の耳に、この世で一番聞きたくなかった声が飛び込んできた。

いや、空耳だ。空耳でなくちゃおかしい。

何故ならこの春から、私は煩わしいだけだった家族と離れることに成功し、誰もが一目を置く名門大学へと進学して、待望の一人暮らしを始めたのだ。希望に満ち溢れた新生活がスタートしていたはずだ。

それが大学内の図書室の書架の一角で本を手にしたところで、突然誰かに腕を掴まれ——視界が歪んだ。

なんとか倒れないよう、両足に力を入れて踏ん張った直後に目の前が明るくなり、思わず目を閉じ——今に至る。

眩しさを調整するように、ゆっくりと目を開ける。すると、目の前に見えたのは、通い慣れた図書室ではなく、どこかの魔法使いの少年が活躍する小説に出てきそうな、中世ヨーロッパを思わせる石造りの壁に囲まれた広間。

「……は？」

立ちすくむ私の背中に、軽い衝撃と、甘ったるい声がぶつかってきた。

「レナちゃん！　会いたかったっ!!」

聞こえなかったフリをして、立ち去りたい。

うん、会いたかったのはアナタだけだからね——妹よ。

❀　❀　❀

十河家の双子姉妹は、小さい頃から近所でも有名だった。

一卵性双生児の姉・怜菜は、小学生の頃から、教師の間違いを指摘するような頭脳を持ち、成長するにつれて天才、神童の名を欲しいままにしていた。一方で妹・舞菜は、姉に及ばない頭脳を、愛嬌でカバーしようとしたのか、自分磨きの方向へと突き進んだ——そんな、別方向に極振りした姉妹として。

そして両親には子供らしい愛想を置き忘れたかのように勉強に没頭する怜菜より、う

るうるの瞳で天真爛漫な振る舞いを見せる舞菜の方が、好ましく思えていたに違いない。

笑顔で「お願い」をすれば周囲がなんでも叶えてくれる、ダメ人間養成の典型とも言える環境下でお育ちあそばされた妹とは違い、こちらはちょっとでも口を開こうものなら「お姉ちゃんなんだから我慢しなさい」「お姉ちゃんなんだから、妹を助けてあげなさい」「この世でたった一人の妹を顧みないなんて」――等々、私には外面に騙される者たちの『自覚なき悪意』の声が常に降り注いだ。

おかげで順調に、私の拗れた性格が出来上がっていくことになった訳なんだけど。

……私のせいじゃないと、ここは断じて主張しておきたい。

そのうえ、両親は良家の子女ばかりが通い、学力よりも財力がモノを言う中高一貫の私立中学に無理矢理私と舞菜を入学させた。

もちろん偏に、学力が底辺をさまよっている妹を、考えうる中で最も良い学校に進学させることを優先した結果だ。私に期待されていたのは当然、舞菜のフォロー。

このあたりで、私は家族全てに完全に見切りをつけ、あることに気が付いた。

――十河家は、妹を中心に回っているのだと。

このままでは、私はいつまで経っても妹の「付属品」だと。

だから私はそこから、密かに六年越しの家庭内叛乱計画を立てた。

中高の六年間では学年首席を維持し、妹を適度にフォローしつつ、その学園の姉妹校である、お嬢様系女子大への推薦入学枠を妹と共に得ようとしている――

妹にも、両親にも、最後までそう信じさせ、いよいよ高校三年の大学入試願書提出締切日の当日、私はこっそり担当教師を訪れ、自分の願書だけを撤回した。

推薦入試当日は、体調を崩したように見せかけて受験を回避。裏では親身に接してくれていた教師や友人たちの協力を仰ぎながら、別の入試を受けた。結果、まだその高校からは誰一人として合格者を輩出していなかった、日本最高峰の大学に合格したのだ。

それを知り、当然のように反発した両親や妹には、どうしても進学実績を残したい学校側と手を組み、妹の推薦が取り消しになるかも……などと、伝家の宝刀を抜いていただいて、最終的に入学手続きを取ることを認めさせた。

そうしてやっと、私は実家から離れることが出来た。

地元でチヤホヤされている間は、舞菜もこちらに押しかけてくることはない。

お山の大将で、満足していればいい。

私の知らないところで、私の知らない人と、幸せになればいい。

これからは、自分一人のために、時間を使うのだ！　そんな風に未来は薔薇色のはずだった。

——それなのに。

❀　❀　❀

「レナちゃん！　会いたかったっ!!」

私の名前はレイナだと、何度言っても聞く耳を持たない妹。自分がマナだから、レナの方が、お揃い感があっていい——あくまで彼女は私を、自分を飾るアクセサリーか何かだとしか考えていない。

しかも、悪意なく本気でそう思っているというのが質が悪い。

今も、こうして状況が分からないままの私に纏わりつくように抱きついて、猫なで声で何か寝言を叫んでいる。

「たった二人の、血を分けた双子の姉妹だもん！　マナを助けてくれるよね!?」

相変わらず、随分と都合のいいことを言う。私がアナタに助けてもらったことなんて、ただの一度もないんですけど。

（……落ち着け、私）

背中越しに突然抱きついてきた妹に現状の正確な説明など最初から期待出来ず、周囲

に視線を走らせる。中世ヨーロッパ風の建物に、足元には、自分を中心に描かれた不思議な紋様の円。

私は筋金入りの現実主義者だけど、抱きついている妹をよく見れば現代社会には似つかわしくないドレスを着ている。そして円の中には、私と妹と——もう一人。

豪奢な金の刺繍が施されている青地のウェストコートを纏う男性。紺青色の髪と瞳。年齢は二十代後半と言ったところか。その現実離れした色彩に少しだけ嫌な予感がする。

美形には違いない。だけどどうにも無表情の仮面が強固に張り付いた、無駄に威圧感のある残念な美形……と言った感じだ。

どこかで——何かで見た、容貌だと思いつつも、すぐには記憶中枢が刺激されない。

そんな男性と視線が合いかけたその時、背後から別の声が、妹を呼んだ。

「無事に姉君とは再会出来たようだ、マナ」

「フィル！」

何年経っても変わらない妹の甘ったるい声が、私ではない方向へと投げかけられる。

同時に私に抱きついていた腕も、あっという間に解かれた。

悲しいかなそれだけで、声の主が美形なんだろうと想像がついてしまった。

ゆっくりと振り返ってみれば案の定、金髪碧眼のいかにもな「王子様」が両手を広げ

て、走りこむ妹を受け止めていた。

あの……なんの茶番でしょうか、これは。思わず顔を顰めると、その「王子様」が私に視線を向けて、こともなげに言った。

「感動の再会中だったところ、すまない。私はフィルバート・アンジェス。このアンジェス国の国王だ」

「……アンジェス国」

「ご存じか？　聖女――妹君から、貴女であればこの国について充分な知識を既にお持ちと聞いたのだが」

「……」

流石に一国の国王陛下を名乗る人物に「は？」と、不敬罪も同然の声をあげることは控えた。

ただ、目は完全に据わっていたかもしれないけど。

そもそも、感動の再会とか言っている時点で、その目は節穴ですかと問いたい。

いや、国王陛下の表情からすると、わざとこちらを煽るように言った可能性も否定出来ない。

そんな私の内心など相変わらず全く無視する形で、妹が無邪気な爆弾を投げて寄越した。

「レナちゃん、レナちゃん。ここね、あの〝蘇芳戦記〟の中の世界みたいで、それで私〝扉の聖女〟なんだって！　すごくない？」

……意味が分からない。いや、妹が以前から、いわゆる「乙女ゲーム」にハマっていたのは、知っている。現実世界で充分チヤホヤされているのに、二次元の世界でまで、まだそれを求めるかと、呆れていた。

さらに、妹の努力嫌いはここでもいかんなく発揮され、パッケージだけを見て、親にねだってゲームソフトを買わせるものの、そのキャラを攻略するまでの過程にすぐに飽きては続きを私に丸投げしていた。それも一度や二度ではない。

ゲーム〝蘇芳戦記〟も、そんな妹が「ジャケ買い」をした中のひとつだったはずだ。

舞台は剣と魔法の世界。ただし、魔物や他種族はおらず、各国間を繋いでいる〝転移扉〟を維持させる魔力を持つ者が〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟と呼ばれ、代々、国から手厚い保護を受けている。

その世界に魔力はあれど魔法を自在に使える者は稀で、人々は灯りを点すにしろ、火を熾すにしろ、日常生活の多くを魔道具に頼りながら過ごしている、というような設定だったはずだ。

プレイヤーは〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟や一国の王女、王子の婚約者だったりと、プレイをスタートする国ごとに様々な役目に置かれるのだけど、いずれの役割に就くにせよ目的は自分がプレイする国の〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟を害させないことだった。

結局のところ、その世界では馬車移動が主体なため、長距離を瞬間的に移動出来る〝転移扉〟の存在は非常に重要なのだ。仮にゲーム内で〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟を失い、〝転移扉〟の維持が危うくなった場合にはバッドエンドが確定する。

各国の登場人物がいずれも美形揃いなために妹のような人間がプレイしがちだったけど、ゲームの内容はむしろ異世界での国盗（くにと）りを目的とする「戦略シミュレーションゲーム」と言った方が正解で、妹自身まだパッケージのオビでしか概要の把握をしていなかったはず。

世のゲーム愛好家さんに謝れ、と言うくらいには、妹はこのゲームを舐めきっていた。

……そもそも、妹の言い分としての〝扉の聖女〟という呼称自体が、正しくない。

正しくはその代の〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟が女性であれば「聖女」と呼ばれ、男性であれば「聖者」と呼ばれているだけだ。

――さて、ということは乙女ゲームの世界に転移したということ？

この場合「戦略シミュレーションゲームの世界に転移」か。

そう思って眺めると、妹がベタベタと纏（まと）わりついているのは確かに〝蘇芳戦記〟内のスチルで見た、アンジェス国の若き国王フィルバート・アンジェスその人だ。

元は第三王子だったはずだけど、流行病やら、王族内のゴタゴタやらで、上二人の兄弟と他の王位継承権保持者を相次いで亡くし、タナボタ的に王になったとされている。が、本当のところは分からない。

ゲーム内では「冷酷」「残虐」「残酷」と、およそ美形キャラへの賞賛とは程遠い設定がなされていた。

そして、ここがアンジェス国であり、目の前に立っているのが国王ならば――

私はチラリと、無言のまますぐ傍（そば）に立つ男性に視線を向ける。

――エドヴァルド・イデオン。宰相であり国王の幼馴染。そして彼の懐刀（ふところがたな）であり、国家の頭脳。

「ああ……」

私は盛大なため息をついた。

どうやら本格的に、この異世界に「召喚された」事実を受け止めなくてはいけないようだった。

「姉君？」

国王、フィルバート・アンジェスの声に、ハッと我に返る。

妹はともかく、一国の国王まで無視するのは、人としていただけない。

私は国王に向かって一礼した。

「お初にお目にかかります。レイナ・ソガワと申します。そこにおりますマナ・ソガワの実の姉にございます。見たところ、この世界で右も左も分からなかったであろう、妹を保護してくださっていたことを、姉としてまずは御礼申し上げます」

日本在住の一般市民に、ヨーロッパ貴族的なカーテシーの挨拶は無理だ。

そのあたりは慣習の違いとしてご容赦願いたい。

「ああ、固い挨拶は抜きにしてもらって構わない。なんと言っても、聖女マナの姉君なのだからな」

フィルバートの声は、言葉だけ聞くと鷹揚なようだけど、実際の声の調子はかなり淡々としていて、その視線は私の見極めをしようとしているようにも見える。

「……感謝いたします、国王陛下」

いっそ不審者として放り出してくれて構わないのに――と内心で思ったのがうっかり表情に出ていたのか、フィルバートは僅かに口元を歪めた。

「聖女マナが、姉君はとても優秀だと、ことあるごとに口にしていた。なるほど確かに、一筋縄ではいかなそうだ。今の状況に対して無知なようには見えない」

返事の代わりに、私は軽く唇を噛む。迂闊なことを答えて言質を取られるような愚を犯したくないのに、フィルバートの言葉はそれを許さないとばかりに私を追い詰める。

「もちろん！　レナちゃんは、日本で一番の大学に合格した、自慢のお姉ちゃんだから！」

「……っ」

そして、無邪気という名の愚を犯す妹が、フィルバートにさらなる情報を与えていくのだ。

（この、バカ舞菜！）

知らない人についていってはいけません、とは小学生でも習う。相手の素性も目的も不確かなうちから、己の手の内を晒すなどと、冗談じゃない。

このまま流されれば、私はここでも舞菜の代わりに、何かをやれと言われるに違いない。

フィルバートの口調や舞菜の表情、さっきまでの態度からして、私の推論は間違ってはいないはずだ。

（また、私を貴女のパシリに使うつもり？）

もう「たった二人の姉妹なのだから」で、自分の時間を搾取されるのはごめんだ。

物心ついてから高校卒業まで、お釣りがくるぐらいに手は貸してきた。

これ以上、アナタのためには梃子でも動かない！

「……大変不躾なお願いとは存じますが」

さあ、考えないと。

六年越しの「逃亡劇」をまた繰り返すのかと思うと正直涙が出そうだけど、妹という名の鎖には、もう囚われない。私は頭を下げたまま、言葉を続けた。

「私が存じておりますことと、実際の出来事とを、まずは擦り合わせたく思うのですが。最も正確に、詳細に、国の現状を知る方と話をさせていただけないでしょうか」

言外に「舞菜とは話をしたくない」というニュアンスを含ませておく。

好き嫌いは横に置いておいたとしても、妹の話は主観論が大半になってしまう。真面目に言って、役に立たない。

「……まずは二人で、積もる話でもした方がいいのではないか？　しばらく会っていなかったのだろう？」

フィルバートの表情が、少し曇ってきているかもしれない。離れ離れになっていた姉

妹の感激の対面を想定していたのが、いつまで経っても、微塵もそんな雰囲気にならないからだろう。

……すみませんね、世間一般の仲良し姉妹のような反応が出来なくて。

「それは、後でいくらでも出来ることですから。まずは状況を理解して、自分の中での安心と落ち着きを得たいと思っております」

「ええー？　レナちゃん、昔みたいに、パジャマで夜通しおしゃべりしようよぉ」

……それは、アレかな。アナタが当時の彼氏と電話でずーっと喋っている隣で、乙女ゲームを延々と攻略させられていたとか、その時のことかな。

うん。随分と斬新な日本語意訳だよね。

「……舞菜。あの〝蘇芳戦記〟の発売って、受験シーズン真っただ中だったよね。そんな時にゲームをやり込めたと思う？　貴女が私に何をさせたいのかは知らないけど、私の知っているゲーム知識と、今のこの世界の情勢との答え合わせをしないことには、何も始まらないよ？」

「ええー？　そうなのぉ？」

「何もしなくていいって言うなら、これから貴女の部屋に行って、ご希望のパジャマトークに勤しんでもいいけど」

実際、何もしなくていいなんて、そんなはずがないのだ。
私のカマかけに、案の定、舞菜は黙り込んだ。
「――イデオン宰相」
口元に手を当てたフィルバートは一瞬考えた後、円内に無言で佇んでいた紺青色の髪の男性――エドヴァルド・イデオンの方に視線を投げた。
「任せるぞ」
「陛下、それは……」
「私は、聖女マナを休ませる。召喚術者たちも、短期間での二度の召喚に、さぞや疲れたことだろう。この場合、おまえが適任と思うが？」
「……」
後始末を押し付けられる格好になるため、不満はあるのかもしれないけど、国王の判断としては、あながち無茶ぶりではない。それはエドヴァルドも内心では分かっていたのだろう。
やがて短く「御意」と、頭を下げた。
またね！　と、軽い調子で手を振る舞菜とフィルバートらが次々と引き上げていき、最後広間には、宰相閣下と私、二人がぽつんと残された。

さて。
まずは、私の八つ当たりを受け止めていただきましょうか――宰相閣下。

第一章　背中のネコは旅に出た

「こちらへ」

エドヴァルドは、それだけを言うと、くるりと身を翻した。

期待はしていなかったけど、冷徹あるいは鉄壁宰相の名に恥じず、愛想の欠片もない。

勝手に召喚んでおいて、随分な対応じゃなかろうか。

そんな宰相閣下に続いて広間から廊下へと出れば、白と黒の大理石が組み合わさる見事な白亜の回廊が先へと続いていて、あまりの優美さ、非日常性に、私は思わず息を呑んでしまった。

ここが日本ではないと、嫌でも納得させられてしまう。

前を歩くエドヴァルドは振り返らないため、私の動揺には気が付いていないみたいだったけど。

やがて、ひとつの部屋に入る——恐らくは、宰相の執務室だろう。

中からは「お帰りなさいませ」と、別の声も聞こえてきた。

続いて入れとの、言葉も合図もないけど、もう開き直って、エドヴァルドのすぐ後ろから部屋の中へと足を踏み入れた。すると驚いたような視線がこちらへと飛ぶ。

「閣下、もしやこちらは——」

「ああ。聖女マナの姉君、レイナ・ソガワ嬢だ」

どうやら、話はちゃんと聞いていたらしい。

何より、私を「レナ」としか呼ばない舞菜から話を聞いていただろうに、きちんと私のフルネームを覚えていてくれたことは、ここに至るまでの若干失礼だった態度への腹立たしさをやや薄めてくれた。

エドヴァルドが話しかけた茶髪の青年の方をふと見ると、向こうから先に頭を下げてくれた。

「初めまして。イデオン宰相閣下の副官を務めております、シモン・ローベルトと申します」

「ご丁寧にありがとうございます。レイナ・ソガワです」

「レナ様ではなかったのですね。いえ、不躾な話で申し訳ありませんが」

「ああ、お気になさらないでください。自分がマナだから、私もレナの方がいいと言う、妹の独自理論——いわば、愛称のようなモノですから」

「なるほど。では、レイナ様とお呼びした方が？」
「……様は、少しこそばゆいですね」
「では、レイナ殿で」
「……そうですね」
どうやら、この宰相副官、シモンは、無表情の上司をフォローする役割でもあるのか、他人の懐に入り込むのが、ひどく上手い。いつの間にか私は、名前呼びをされることに頷いてしまっていた。
「レイナ殿は、珈琲と紅茶、どちらがお好みでしょう？」
「えっ……いや、その……お気遣いなく、と言いましょうか……」
「遠慮なさらないでください。どちらのご用意もすぐ出来ますし、ちょうど私も休憩として、どちらか飲みたいところでしたので」
「……では、珈琲で」
承りました、と軽く頭を下げたシモンが、隣室へと消える。
どうしたものかと、入口近くにそのまま立っていると、眉を顰めたエドヴァルドが先にどさりとソファに腰を下ろした。
「……そのままでは、話がしづらいと思うが」

なんだろう。向かい側に座れとでも言いたいのだろうか。言ってくれなければ分からないし、変に勘繰られても困るので、とりあえず予防線を張っておくことにする。
「私は王宮の住人ではありませんから、許可もないうちから腰を下ろすような、傍若無人な振る舞いに及んだりは出来ません。身分に即した最低限の儀礼は遵守させていただきます」
「聖女の姉だろう」
「そもそも、異世界から呼び寄せた小娘をどこまで信用されていらっしゃるんですか？血縁としては、確かに私はマナ・ソガワの姉ではありますけれど、それがすなわち、私がこの王宮内で尊大に振る舞っていいということにはならないはずです」
淡々と言い切る私に、エドヴァルドが僅かに目を見開いた。
何故、驚かれなくてはならないのか。当たり前だと思う。聖女の姉などと、聞こえはいいけど、実際のところは、単なる一般人だ。なんの身分証明にもなっていない。
そんなことに気が付かないような、脳内お花畑娘ではない。
そもそも、エドヴァルドの口調からして「聖女の姉」を尊重している風には聞こえないのだから。
「座らせていただいた方がよろしいでしょうか、宰相閣下」

「……そうしてくれ」

とはいえ、これ以上はただの屁理屈になってしまうので、こちらから許可を請う形で、私はエドヴァルドの向かいに腰を下ろした。

「それで、何が聞きたい」

冷徹とも鉄壁とも称されている宰相閣下の声は、明らかに不機嫌だった。

――確か〝蘇芳戦記〟でアンジェス国からスタートすることを選んだプレイヤーが置かれる立場は〝扉の守護者〟本人だ。

アンジェス国は、周辺諸国と比べ最も小さい。故に常に侵略の危険に晒されており、プレイヤーは〝転移扉〟を維持する魔力を損なわないようにしつつ、他国が仕掛けてくる権謀術数を撥ね返すことがプレイの根幹だ。そして王あるいは宰相と結ばれて、共に国を維持していくのがハッピーエンド、という部分が一応の恋愛ゲーム要素と言えるだろう。

その中で、エドヴァルドに気に入られるルートに入るために必要なのは見た目を飾り、甘いシチュエーションに持ち込むこと……ではなく、「国のためになる何か」を彼にもたらすことだ。そのせいで、世の乙女ゲーム愛好者にとっては、最も攻略ハードルの高いキャラとさえ言われていた。

加えてフィルバート・アンジェスも、貴公子然とした容貌で愛想こそあれど、内面は嗜虐性の高い、ドS以上のSキャラで、うっかりすれば拉致監禁エンドに転がり落ちかねない。そんな主従をいただくアンジェスルートからゲームを始めようとする人など、発売当初からほぼ皆無だった。

私自身、このゲームでアンジェスルートに手をつけたのは最後だったくらいだ。

ちなみに妹の前では、ゲームに手をつける余裕はなかったと言いつつ、実は受験が終わった頃に一通りプレイを済ませてはいる。乙女ゲームではなく国盗り戦略ゲームだと考えれば、実際、いい頭の運動になったからだ。ただそれを、迂闊にあの場で口にするつもりがなかっただけで。

そんなことを思い返しつつ、下手な言質を取られないためにも、まずは、当たり障りのないところから聞いておこうと、口を開いた。

「そもそも、どうして〝扉の守護者〟が、この世界の外側から呼ばれて、私までそこに追加されることになったんでしょう」

エドヴァルドは僅かに眉根を寄せた。

ことさらに「国の外側」を強調する私の口調や態度に思うところはあるのかもしれないけど、実際に口にするのは、別のことだった。

「……先代が殺された。急ぎ新たな守護者を立てる必要があり、該当者の捜索範囲を、国の内外にまで広げた結果、反応があったのが、国の外側だったというだけだ」

「……なるほど」

「本来ならそれで終わりだった。だが、当代〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟として呼んだマナ・ソガワ嬢に充分なのは魔力だけ。扉の維持自体は、手をかざせば勝手に魔力を吸い取って変換していく術式になっているから、確かに定期的な魔力供給以外で、無理に何かをする必要はない。陛下も強引な方法で招いた手前、それ以上は言わなかった。言わなかったが……しかし、それは日々、彼女が陛下の隣で媚（こび）を売っているだけでいいという話にはならない」

「あー……」

私は決まり悪げにエドヴァルドから目を逸らして、右手の人差し指で自分の頬を掻いた。

さっき国王陛下に走り寄って胸に飛び込んだお花畑全開のマナの姿が脳裏によぎる。

「多少は、この国のことや周辺国の事情を理解してもらわないことには、いつまでも誘拐や殺害の危険性が付きまとう。守る義務はこちらにあると言われればそれまでだが、近隣の事情を知っているのと知らないのとでは、リスクがあまりに違う」

「言っておきますが、本人は無自覚無意識ですよ。無邪気と取るか、質（たち）が悪いと取るかは、人それぞれでしょうけど。ちなみに、嫌いな言葉は『努力』だと思います。負担を押し付けられる身内がいたものだから、尚更に」

この人はさっきの広間で、私が完全に白（しら）けていたのを見ていたので、もはや取り繕っても無駄だろうと、あえて背中のネコを下ろして、本音をぶつけてみた。

もちろん「負担を押し付けられる身内」とは、私のことだ。

「どうせ言われたんですよね。『自分には双子の姉がいる。国一番の学校に合格出来るほどだから、自分に足りない部分はきっと補ってくれる。たった二人の姉妹、きっと自分を支えてくれる』――とかなんとか」

「……っ」

案の定、頭の切れる宰相閣下は、私の皮肉に気が付いて一瞬怯（ひる）んだ様子を見せた。

ちょうどそのタイミングで、シモンが、珈琲（コーヒー）を持って隣室から戻ってきたために、私もそれ以上皮肉をぶつけることはなかったんだけど。

「どうぞ、冷めないうちに先にお召し上がりください。聖女マナは紅茶の方がお好きなようですが、珈琲も時折口にはされます。そちらの国と、大きく味が異なることはないと思うのですが」

いたたまれない空気に気付いたのか、気付かないのか。珈琲（コーヒー）とミルクポットとシュガーポットらしきものを置くと、シモンはすぐさま部屋の隅へと下がっていった。エドヴァルドは場を仕切り直そうとしたのか、無言のまま、カップを手に取る。

どうやら、彼はブラック派らしい。

仕方がないので、私もカップに手を伸ばしたものの、そこでピリリと、得も言われぬ緊張感が、部屋に満ちるのを感じた。

「……レイナ殿？」

なんだろう。

実家と同じ空気だ。

私の意見など必要としていない、舞菜のために振る舞うことを当然とする——空気を読めと、冷やかな表情を向ける両親がいた、あの家の空気と同じ。

「……いえ。なんでもありません」

何気なさを装って、そのままカップの端に口をつけると、確かにエドヴァルド、シモン両名の持つ空気が変わった。

「……レイナ殿は、ミルクも砂糖もお入れにならないのですか？　聖女マナは、いつも両方をたっぷりお入れになっていらっしゃいますが」

「双子だからと言って、好みまで同じとは限りませんよ。というより、産地や淹（い）れる方の腕によって、味が変わるのですから、どれも同じように混ぜてしまっていては、本来の味さえも曖昧になってしまいます。生産者に敬意を払う意味でも、私は一杯目を必ずブラックで飲むことにしています。その後で、必要があれば、ミルクも砂糖も適宜加えてはいますが」

「……では、そちらのお味はいかがですか？」

うーん……シモンってば、さっきから演技が下手だなぁ……

私はまだカップに口をつけただけで、中身を飲んでいない。

「そうですね……」

誰が信用出来るかも定かではない場所で、出された飲み物にホイホイ口をつけるなどと、愚の骨頂だろう。舞菜じゃあるまいし。この人たちは、私の脳内もお花畑と思っているんだろうか。

「ローベルト副官」

私は、エドヴァルドだけでなく、彼に対しても色々取り繕うことは諦めた。

私にとって「舞菜が○○していたから」と言うのは地雷だと彼も理解した方がいい。

「シモンで構いませんよ。聖女マナもそのように私をお呼びですし」

「そうですか」

我ながら、返した声はとっても冷やかだったと思う。

結局、実際に珈琲は一口も飲まないまま、左手でシュガーポットの蓋を開けたその上から、私はカップの珈琲をとぽとぽと中に流し込んだ。

「レ……っ、レイナ殿!?」

注ぎ切ったところで、パッと手を放すと、当然それは、下へと落下して——陶磁器製のミルクポットの上に、落ちる。

「——!!」

「ごめんなさい、ちょっと眩暈がして、手が滑ってしまいました」

砕け散ったコーヒーカップと、ミルクポットを見ることはせず、私はニッコリと二人に微笑って見せた。

うん、私を与しやすいと思うなら、後悔してもらうよ?

エドヴァルドは、私の目の前で珈琲を飲んだ。だとすれば、カップを取り違えられる可能性を考えて、ミルクや砂糖の方に、何か仕掛けているかもと、警戒するのは当たり前だ。

私がアンジェス国のことをどこまで分かっているのか、喋らせたければ自白剤でも使うだろうし、あれこれ説明したくないから、とりあえず寝かせて別室に放り込め……となれば、使うのは睡眠薬だろう。

実際、間者の疑いがある怪しい人物をどう取り扱うかは〝蘇芳戦記〟の中にもあるし、この国の国王も宰相も、そう言ったことに躊躇するような為人じゃなかったはずだ。

自分がこの世界について無知ではないと宣言するようなものなんだけど、背に腹は代えられない。

眠っているうちに舞菜の部屋に運ばれたり、心の中にため込んでいる妹や家族への鬱屈をここでペラペラ喋らされたりする方がもっと困る。

「あ、お代わりは結構ですのでお構いなく。後で、片付けて下さる侍女さんなり執事さんなりには、頭を下げさせていただきますので」

私はそう言って、動きかけたシモンを牽制しておく。

手にしていたカップをソーサーに戻しながら、じっとこちらを見るエドヴァルドの目は間違いなく据わっていた。

「……妹と二人、助け合いながら生きていくのはごめんだ、と?」

「当たり前です」

言葉尻に被せる勢いで断言したせいか、エドヴァルドだけではなくシモンも息を呑ん

でいるようだ。

気にせずに言葉を続ける。

「世の男性陣は、ゆるふわ髪に自称ナチュラルメイクで、こてんと首を傾げて、うるうる瞳で『お願い』をする妹に、もれなく釣り上げられているようですけど、それはこちらの世界でも、どうやら同じみたいですね」

彼らを馬鹿にしきった感情は、多分表情からダダ洩れだっただろう。

明らかに、釣られていないであろう、エドヴァルドにまでそう言っているのは、もちろん厭味だ。たった二人の姉妹で助け合い——そんな美辞麗句、一番信じていないのが、エドヴァルド本人であるはずなのだから。

「その『お願い』で全てを搾取される側の気持ちなんて誰も考えない。助け合い？　生まれてこのかた十九年、妹を助けたことは山ほどあれど、助けられたことなんてただの一度もありませんよ。ええ、一度も！　くだらない一般論で説き伏せようとされるのが、世に名だたる宰相閣下のやり方ですか？」

「……っ」

「恐らく私は、それなりにこの国や周辺諸国の知識を持っているとは思いますけど、それは古いかもしれないし、誤って伝わっている知識もあるかもしれない。妹のような〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟としての絶対的な食い扶持を稼ぐ術（すべ）が私にある訳ではないので、生活費の代わりに、知識と頭脳を差し出せと言われれば、それは仕方がないと覚悟しています。ただそれは、無償で妹のために奉仕することと同義ではありませんので、そこは間違えないでくださいますか」

「……食い扶持」

「だって、今すぐ元いた場所に帰せと言われて、それって能力的に可能なものですか？」

異世界転移の物語の中で、元いた世界に戻ることが可能であることは、ごく稀（まれ）だ。

大抵は召喚するだけで魔力を使い果たしているとか、魔力があったとて、座標や気候条件も二度と重ならない。召喚された者は、誘拐同様に新たな地に縛り付けられることになる。

ほとんどダメ元で私も聞いてみたけれど、案の定、エドヴァルドもシモンも答えない。

——それが、答えだ。

「戻せないですよね。そんなことだろうとは、思っていました。だったらどうやっても、この地で生活していくためのシゴト、お金稼ぎの手段が私には必要です。『聖女の姉』なんて、肩書だけで中身は空っぽなのは理解していますから。ああ、私が妹と大の仲良しと思っていて、聖女の姉だと持ち上げて、衣食住を適当に保証しておけば、ホイホイ

と妹に協力するとでも思ってました？」

厭味ったらしく言ってみれば、エドヴァルドはともかく、シモンの目が泳いでいる。

従来、人はいいのかもしれないけど、つくづく腹芸の出来ない人だと思う。

「そんな牢獄に繋がれるも同然の生活なんてごめんです。だったら今すぐこの国を出奔して、ギーレン国にでも雇ってもらいます。この知識と、新たな当代〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟に関する情報とがあれば、それなりに高く買ってもらえるでしょうからね」

私のゲーム知識が正しければ、このアンジェス国の隣国、ギーレンの国王は領土拡大にかなり貪欲だ。アンジェス国にしてみれば、新たな〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟の情報はなるべく秘匿（ひとく）しておきたいだろう。

だからこそ、そう言って私が自分のこめかみを人差し指で指させば、エドヴァルドの片眉が僅かに動いた。

「……姉妹の仲が、これほどまでに拗（こじ）れていたとはな」

「別に拗（こじ）れてはいませんよ。妹にとって私は自分を飾る便利な駒扱いですし、私にとっては、もはや顔のよく似た赤の他人ですから、表立ってケンカをしたことなんて一度もありませんしね。まあ大抵、妹側に都合がいいように皆思うんですよ。自分に置き換えてみれば、必ずしも全ての兄弟姉妹の仲がいいなんて、幻想でしかないと、すぐに気が

付くはずなのに」

ああ、と、私はついでにダメ押ししておいた。

どうもこの、自他共に有能と思われている若き宰相閣下を言い負かしたいと――負けず嫌いが良くない方向に振り切れている気がする。やめる気もないけど。

「多分、貴方自身、これ以上妹に関わるのが面倒で、あまり深く考えないまま私に丸投げしようとされたんじゃないんですか？　普段なら、もっと色々探りを入れたりしたはずでしょう。所詮小娘と侮（あなど）った結果は、ご自身で重く受け止めてください」

そう言い捨てるとエドヴァルドの目はますます剣呑になり、シモンが顔色を変えていた。

が、そんなことは私の知ったことじゃない。

実家での冷たい視線に耐えて、培（つちか）われてきた根性を、舐めてもらっては困る。

ただこれ以上は、自分の立場も不利にしていくだけなので、話を元へと戻しておこう。

「――どちらにしても、今は一文無しなので、私が持っている知識と現在の時勢とを擦り合わせて、アンジェス国に有利な状況を探ることなら、出来ると思いますよ。そうですね……さしあたって文官として雇っていただければ、有難いです。もしくは、経理知識はありますから、どこかの上位貴族の領政の補佐でも構いません。なんにせよ恒久的

な妹の補佐だけは、断固拒否します」

馬鹿にしてはいけない。卒業後も本格的に実家とは距離を置くつもりで勉強を重ねてきていたのだから、どんな状況でも働けるほどの努力は積み重ねてきた。

怒るなら怒ればいい。

そんな私の挑戦的ともいえる視線を、エドヴァルドはしばらく黙って受け止めていた。

「……随分な自信だな。招いておいて言うのもなんだが、こちらは、妹の手綱をとれる人間を求めているのであって、文官を求めている訳ではない。このまま処分される可能性だってあるとは思わないのか」

それはそうだろうな……と、エドヴァルドの言葉に内心で私も頷く。

しかし、妹は、全てを自分の都合のいい方向に解釈する、いわゆる「言葉が通じない」人種だ。あの容貌に釣られない真っ当な人間が話をすればただただ疲れるだけだ。だったら、少しでも妹の情報を握り、手綱をとることが出来そうな人間を、容易に手放すことはないと踏んだのだ。

「その可能性より、妹を持て余している可能性の方が高いと判断しただけのことですよ。国王陛下は存じませんけれど――少なくとも宰相閣下、貴方は」

「――――」

あ、どうしよう。冷徹とも鉄壁ともいわれる宰相閣下の表情が微かに痙攣っているのを、ちょっと面白いと思ってしまった。

実は私にも、Sっ気とかある……？

私は最後のひと押しとばかりに言葉を追加した。

「私も、妹についてまるっきり面倒を見ないとは言いません。少なくともなんらかの方法で、この世界でも食べていけるようになるまでは協力します。ええ『協力』です。妹の代理として社交やら外交やらの矢面に立てと仰るなら、そのようにします。ただこの城の中で、妹と住居を共にすることはしません。どこか下宿先を紹介していただければ結構です」

「そ……れは……」

「そんな、聖女様の姉君にあたる方を城下街へなど――」

シモンも慌てたように身体を強張らせているけど、そこは、私も流されない。

「確かに私は聖女の姉ですが、貴族の出でもなければ〝扉の守護者〟としての魔力もない。要は一般市民ですから、相応の扱いにしていただいて結構です。むしろそうしてください」

恐らく、舞菜は王宮からは出ない。出たいとも思わないはずだ。私が城下に出ると言

えば、表面上は引き留めにかかるだろうけど、そこは聖女サマとの扱いの差を明確にしておくべきとかなんとか、こちらが下手に出ればあっさり頷くだろう。

「大体、そちらにはそちらの事情があって、召喚を行ったのかもしれませんが、私や妹の側からすれば、ただの誘拐ですからね。周りからチヤホヤされることを妹が対価としているなら、それはそれで構いません。ただし私はそうじゃないというだけの話です。誘拐の代償はそれなりに払っていただきます。お互い、そのあたりがいい落としどころじゃないかと思うんですけど？」

こちらも、現時点で一人では生活が出来ないのだから、ある程度の妥協は必要だろう。

エドヴァルドの方とて、他国や国内の有力者からの悪意、害意に無防備な〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟を、ある程度抑えてくれる人間を望んでいる。

それが主目的なら、四六時中、私が妹の傍（そば）に張り付いている必要もないはずだ。

平時の際は、適度にイケメンがチヤホヤしていれば妹は満足するし、それくらいは国王なり宰相閣下なり、他の文官なりで、やってくれたとてバチは当たるまい。

一人や二人くらいは、本気で舞菜の傍仕（アレそば）えを望む騎士だっているかもしれないし。

「……誘拐」

あえてキツめの言葉を選んでみれば、エドヴァルドには堪（こた）えているようだ。

「何か間違っていますか？」

「そうか……そうだな……」

「あと、何故私が珈琲（コーヒー）をぶちまけたのかも、ご自身で理解されていらっしゃいますよね？」

「……っ」

「そこまでされて、どうして私が大人しく妹に寄り添うなんて、思うんですか。むしろ私に、妹に対して含むところがなかったとしても、それはそれで『こんなところに妹を置いておけるか！』としかならないと思いますけど、普通」

策士、策に溺れる――とは、このことか。

「閣下のご身分に対して、不敬だということ以外の反論、異議がありましたら、お聞きしますので、どうぞ、ご遠慮なく」

閣下……と、シモンが不安げに、エドヴァルドを見ている。

正直、言いたいことはまだまだあるけど、今後のためにも、そろそろ目の前のこの宰相閣下が、舞菜（いもうと）の存在をどこまで許容しているのかくらいは知っておきたかった。

――いや、とエドヴァルドの呟く声が聞こえるまで、どのくらいの間があっただろうか。

エドヴァルドは腰かけていた応接用のソファからおもむろに立ち上がると、私に向かって、深々と頭を下げた。

「申し訳ない。私は貴女のことを、こちらの世界でのいわゆる『姫君』『ご令嬢』と同じ枠内で捉えて、軽く見てしまっていた。そもそも国のためとはいえ、異なる世界に住んでいた貴女には、なんの関係もない話だった。その通り、全てが我々の都合でしかない。ある日いきなり、貴女の生活全てを奪い去ってしまったんだ。落としどころと貴女は言うが、今のままでは、貴女の方が圧倒的に負債を押し付けられているのは間違いない」

閣下！　と、顔色を変えたのはシモンの方で、エドヴァルドはまだ、頭を下げたままだ。

高位貴族である彼に頭を下げさせている事の重さは分かっていたけど、すぐには返事をしなかった。だって彼は、多分、私がすぐには許さないと分かっている。

私は、膝の上に置いていた右手を、口元に当てて、少しだけ、考える仕種（しぐさ）を見せた。

――そもそも私が怒っている根本は、そこじゃない。

まあこの際だから、ちょっとくらいは、キレても許されるかな。

「宰相閣下、ちょっと顔を上げて、歯をくいしばっていただけます？」

私は立ち上がった。立ち上がって――言われるがまま、虚を突かれたように顔を上げたエドヴァルドの頬を――勢い良く、引っぱたいた。

「レイナ殿!?」

副官として、シモンにもグーパンで鳩尾（みぞおち）くらい、殴った方がよかったかなと、チラッと思う。

とりあえず、まずは言いたいことを全部言ってしまおう。

私は軽く息を吸い込んだ。

「六年」

そしてずいっと両手でただ、「六」と分かるよう、エドヴァルドに向かって指を立てた。

「貴方がたの身勝手な召喚が、私の六年越しの叛乱（クーデター）を台無しにしてくれました」

その言葉に反応したのか、引っぱたかれて明後日の方向を向いていたエドヴァルドの顔が、ゆっくりとこちらに向けられた。

「……叛乱（クーデター）」

そうなのだ。

実際のところ、何が腹立たしいかと言えば、人が六年かけて計画した、大学進学と同

時に得た自由を、たったの一ヶ月で反故にされたことが一番腹立たしいのだ。

「別に国家が転覆するような、そんな大規模な話じゃないんですけどね。でも人生を賭けた一大事業で、実際に成功もしたんですよ。それが、たったのひと月で、台無しにされた。せっかく自由を勝ち取ったのに、また奴隷に戻された――分かりますよね？そんな状況下で、頭の中がお花畑でいられないことくらいは」

「それは――」

「知らなかった。ええ、そりゃそうでしょう。だから手っ取り早く、貴方がたの行った『召喚』が、何を引き起こしたのか、理解してもらうために、引っぱたかせてもらいました。召喚術とやら自体は、専門の術者か誰かがやったんでしょうけど、私を図書室からこちら側に引っ張り込んだのは――宰相閣下、貴方ですよね？」

図書室で、私は誰かに腕を掴まれた。

光が収まった時、同じ円の中にエドヴァルドが、私の背中に寄り添うように立っていた。

――嫌でも、その「誰か」がエドヴァルドだと分かる。

私が彼を睨みつけると、必死の形相でシモンが私と彼の間に割って入った。

「レイナ殿！　今回の召喚は、確かに聖女マナが望まれ、陛下がご裁可されたことでは

ありますが、閣下は、こちらの都合で来てもらうのだから、せめて宰相位にある自分が――と、召喚の円に入られたのです！　現在の術者たちの魔力は、聖女マナの召喚の際に、枯渇寸前まで使用されていたために、どうしても、魔力量の多い誰かが必要で、それを閣下が……っ」

「だからなんですか？　私に、もっと感謝をしろとでも仰るんですか？　私がお願いして、招待してもらった訳でもないのに？」

「いえっ。ですが……っ」

「私の話を聞いてましたか、ローベルト副官？　私の側からすれば、どう言葉を取り繕おうと『誘拐』でしかないんですよ、今回のことは」

泣きそうな表情になっているシモンは、きっとエドヴァルドを心の底から尊敬して、傍に仕えているんだろう。

平時なら微笑ましいことだけど、とても今は、そんな風には見てあげられない。

「それと私は、誘拐云々のところに憤っている訳じゃありませんし」

「え……」

「ローベルト副官は自分が六年かけて企てた計画を、対策のとりようもない理不尽な理由で潰されたとしたら、どう思いますか？　しかも、その計画が自分が企画した通りに

進んで、軌道に乗り始めていたのだとしたら。本当なら、関係者全員を引っぱたきたいところなんですけど、それも非現実的だから、手っ取り早く上役に矢面に立ってもらった次第なんですが、それが何か？　むしろ、彼の顔ひとつで済ませようとか、私がどれほど今、不本意でいることか」

「ならっ、この私の首ひとつで何とぞ！　何とぞ矛をお収めください！　どうか、閣下のことは――」

「いえ、顔はともかく、首を差し出されても困ります。そもそも、自分のせいじゃなくとも、起きてしまったことに責任を取るのが、上に立つ者としての正しい姿です。貴方の閣下は、充分にそれを分かっているからこそ、今、小娘に引っぱたかれようと、何も仰らなかった」

弾かれたように、シモンがエドヴァルドに視線を向ける。エドヴァルドの方は、じっと私を見たまま、シモンの視線を受け止めることはしない。

それは、私が言っていることを決して言いがかりだなどと思ってはいないし、頬を引っぱたかれたことも、理不尽だとは思っていないということだ。

まさか手をあげるとは思っていなかったのか、当初は少なからずの驚きが瞳に浮かんでいたけど、私が淡々とシモンに語っている間に、自分の中で腑に落ちたんだろう。

黙って受け止めておくことを選んだようだ。

あくまでも冷静なエドヴァルドの姿に、私の方がいらっとしてしまうほどに。

「……怒るなりなんなりしてもらった方が、私ももっと、このやり場のない怒りをぶつけることが出来たんですけど。黙られてしまったら、こちらもこれ以上強くは出られない。今度はこちらの度量が疑われますから。充分強かですよ、貴方の閣下は」

言いながら、シモンからエドヴァルドに視線を戻すと、まだ少し感情が揺れているような、そんな瞳とぶつかった。

分かっていますよ？　淡々と、事実を指摘される方が堪えるんですよね？

泣き叫ばれた方が、対処としては楽だったんですよね？

薬で眠らせてお終い、だったでしょうから――でも、甘い。

見つめ続けると、エドヴァルドが静かに口を開いた。

「シモンの首がいらないのは分かったが、では、私の首ならば？　一度叩いた程度で、貴女の六年は到底取り戻せないはずだ」

「……まあ、そうですけどね」

――宰相閣下、シモンが涙目になってますよ。

貴方もSですか。彼のHPが摩耗してますよ。

「ただ、貴方を処刑だのなんだのと訴えれば、現状から見て、私は一生この城に縛り付けられることになりますよね？　それくらいだったら、貴方の首も残します。私と妹が必要以上に接触しないよう、その優秀な頭脳をフル回転させてください。首よりも、ココを差し出してもらえますか」

私は右手で、自分のこめかみを指さした。

「私への対価は『妹と関わらない人生』です、宰相閣下。そのためには、この国に留まることにも固執していません。貴方がたが妹を不安材料と見做しているのは、先代〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟を殺されたせいでこの国自体が今、不安定だからですよね？　国内貴族とギーレン国、それぞれの脅威が収まれば、妹は今のままでも、問題ないはずですよね」

エドヴァルドの整った顔が、僅かに歪む。

私が、何をどこまで知っているのか気になって仕方がないんだろうけど、それと同時に、私がアンジェスに留まらない可能性を示唆しているのも、面白くないんだろう。

だけど私は妥協しない。

「妹のお守りは、もうごめんなんです」

「……っ」

立ち読みサンプルはここまで